
ミリオンパーツ

野生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミリオンパーツ

【Nコード】

N8901Z

【作者名】

野生

【あらすじ】

結婚式に送られてきた爆弾により、結婚式場に来ていた人々はすべて粉々になって死んでしまった。

その数日後、その爆弾の送り主の元にきた者は……

(ホラー系なので嫌いな人はまわれ右)

Q市にある結婚式場。

その披露宴会場の待合室で、純白のタキシードに身を包む今日の主役の一人。新郎の春樹はるきが、気心知れた仲間から手厚い祝福を受けていた。

「チクシヨウ。やっぱりお前が一番乗りで結婚しやがったじゃねえか」

「一生独身で過ごす、なんて言ったのはどこのどいつだ？」

「いてててッ。こら、止める。せつかくセツトした髪を崩すな」

取っ組み合いながらも、彼らの表情は一樣に穏やかだ。

そんな中、祝いの言葉を告げる中に親友の姿がないことに気付き、春樹の表情に翳りが差す。

「大都だいとは、やっぱり来れなかったのか……」

大都は現在警察官の職に就いているが、昔は春樹とよくつるみお互いにバカをやった仲だ。

しよげる春樹の肩を、彼の友人が元氣付けるように強く叩いた。

「まあ、しょうがないだろ。文句なら、アイツが追ってるイカれた犯人に言っつてやれ」

「そうそう。それで、俺たちは大都が悔しがるような盛大な結婚式にすることが仕事だろ」

「おいおい、あんまりムチャすんなよ」

なにやら企んでいそうな友人に苦笑を洩らし、春樹は係員に呼ばれて一足先に会場へと向かっていった。

友人や親族が会場に招き入れられ、バカな旧友たちの無謀なマジックショーを織り交ぜつつ式は滞りなく進行。

しかし、新郎新婦のお色直しが済んだところで、ちょっとしたサプライズが彼らを待ち受けていた。

「春樹さま、由美さま。式場にご友人の方からプレゼントが届いて

おりました」

そう言って式場の従業員が持つてきたのは、真っ白の梱包紙に真っ赤なりボンがあしらわれたバスケットボールがすっぽり入るぐらいの小包だった。

なんでも、今朝早く春樹の友人が従業員に渡した物らしい。

そして、こんなこった演出をする友人を、春樹は1人しか知らなかった。

「たく、あいつは」

今日、この会場に来ていない悪友に微笑を洩らし、春樹がプレゼントに手を掛けた、その時。

プレゼントから閃光が迸り、紅蓮色の炎を伴う爆発が幸福が満ち溢れていた結婚式場を吹き飛ばした。

Q市に住宅地に建てられた、とある家。

その二階の薄暗い部屋に置かれたテレビが、前日に起こった結婚式場爆破のニュースを映し出していた。

「見てください。昨日Q市の結婚式場で起きた爆発により、結婚式場は大破しております。凄惨な状況です。救急隊が決死の救助活動を行っておりますが、今のところ生存者はおりません。警察は、近頃Q市で起こっている連続傷害事件との関連があるとの見方を示しており、現在犯人の究明に全力を……プツン」

「ぎゃはははは。間抜けな警察なんか俺が捕まるかよ」

テレビを消し、この部屋の住人である男は高笑いを上げた。

薄暗い部屋の中はモノが散乱し、まるでこの男の心の姿を映しているようだ。

そして、その散乱しているモノの中には、昨日結婚式場を吹き飛ばした爆弾の試作品があった。

別に、彼はあの会場にいた誰かに恨みがあったわけではない。

道で人を切りつけるのも、あの会場を爆発させたのも、その理由はただ一つ。

暇だった。本当にそれだけだ。

そして、この暇つぶしは当初の予想以上に彼を興奮させた。

「さーで、次はどんなことをしようか……」

ピンポーン

そんなふうには、彼が残酷的な笑みを浮かべて次の計画を練ろうとした時だった。彼の家の玄関のチャイムが鳴ったのは。

「ちっ。おい、ババァー。誰か来たぞー」

自分の母親をババァと呼び、彼が再び意識を次の計画を練るのに向ける。

ピンポンピンポーン。

連呼される呼び鈴。

そこでようやく彼は、今日は家に家族がないことを思い出した。

ピンポンピンポンピンポーン

「うっせえぞ。いい加減にしろっ！」

止めどなく連呼される呼び鈴に、彼が声を張り上げた、その時。

ガチャ

「なっ！」

彼の部屋に、玄関の扉が開かれる小さな音が届いた。

あれだけ呼び鈴を押して誰も出てこないのなら、ふつうは留守だと思っただろう。

いや、それ以前に自分の声が聞こえなかったのか？

いや、聞こえないはずがない。

親戚か？

いや、今日誰かが訪ねてくるなんて話は聞いていない。

「まさか、強盗っ!？」

そう考えた瞬間、彼の心臓が高鳴った。

それは、強盗に対する恐怖にではない。

彼が、机の引き出しを開け、親に内緒で購入したサバイバルナイフを取り出す。

強盗なら、例え殺しても正当防衛だ。

緊張と興奮に唇が渴き、無意識のうちに彼は下で唇を潤した。ギシギシと、階段が上がってくる音がする。

トトトトと、足音が部屋の前へ近づいてくる。

そして、次の瞬間。

ガシャガシャガシャツ

ドアノブがまるで憎しみを込めるかのように乱暴に回された。しかし、彼の部屋には内鍵が掛っていて、外からでは開けられない。

彼自身も、内鍵を掛けていたことを忘れていた。

「ちっ。しょうがねえな」

いつでも切っ先を突きだせるようにナイフを構えながら、彼がドアへと歩み寄る。

その時だった。

ゴシャツ

「っ！」

部屋の中に異音が鳴り響き、彼が思わず息を飲む。

鳴り響いた異音は、ドアの向こうにいる何かの手が、分厚いドアを突き破った音だ。

ドアを突き破った手が、内鍵に手を掛ける。

あまりに異様な光景に、彼はその手の異様さに気付けなかった。

内鍵を外す指。その五本は、それぞれまるで別人の指をつなぎ合わせたかのように大きさや肌の色が異なっていた。

「ゴクン……」

唾を飲む音が、不自然に大きく聞こえる。

対照的に内鍵を外したドアはその身に風穴を空けられながらも、至極自然に来訪者を迎え入れた。

部屋を訪れた闖入者は、フードですっぽりと頭を隠しており、その体付きからでは男か女かすら定かではない。

闖入者が、自らのフードに手を掛ける。

次の瞬間、この部屋の主たる青年の双眸が、彼の人生で類がない

ほど見開かれた。

フードの下に隠れていたのは、まるで幾人もの皮膚をつなぎ合わせたかのような、つぎはぎだらけの不揃いな相貌だった。左右の眼の大きさから、耳、歯の一本一本に至るまで、まるで統一性がない。

バケモノ

ただ、その言葉だけが青年の脳裏を駆け抜けた。

「う、うわあああああ！」

もはや、快樂などの感情は残っていない。

吐き気をもよおすほどの恐怖が、彼の体を無理やり動かし、部屋に現れたバケモノにナイフを向け飛び出した。

抜き身のナイフが、バケモノの不揃いな指にあっけなく捉えられる。

バケモノは続いて、ナイフを止めた逆の手で青年の手首を掴み、力の限り締め上げた。

「あつがががが」

まるで、百人ほどの力で締め上げられているかのような圧倒的な握力に、青年の口から悲鳴が漏れ、手からナイフが零れ落ちる。

ザスつと、ナイフが床に刺さる音が響く。

しかし、バケモノはそんなナイフの行方など露にも気しない。

バケモノはおもむろにナイフを阻んだ手で青年の人指を掴むと、一切の躊躇なく、あの規格外の力で青年の指を塗り取った。

「あつ……あ……あ……」

指から這い上がってくるかつてない痛み、青年が陸に上がった魚のように口をパクパクさせる。

バケモノは止まらない。

人差し指に続き中指を、中指に続き薬指を、薬指に続き小指を、そして最後に残った親指を、青年の手から塗り取った。

一本指を塗り取られるたびに、青年の体が大きく痙攣する。

青年の前に現れた無情なバケモノは、片方の手の指をすべて塗り

取ると、彼の体を部屋の壁に叩きつけた。

「ガハッ！」

悲鳴すら洩らせなかった青年だが、肺を圧迫され、無理やり呻き声を吐き出させられる。

バケモノは、淡々と壁を伝って崩れ落ちる青年の前に立ちはだかっただ。

「お、お前。誰なんだよ？」

目に涙を湛えながら、青年がバケモノに不条理を訴える。

「誰なんだ……だと」

そこでようやく、バケモノは口を開いた。しかし、その声は複数人間が同時にしゃべっているようで、ひどく聞き取りづらい。

「お前は、自分が殺した者の名すらしらなかつたのか」

深い怨嗟の籠った声が、バケモノの不気味な口から洩れる。

その言葉を理解し、彼が答えを導き出す前に、バケモノは答えた。

「俺の名は……春樹」

春樹。

その名を一瞬青年はわからなかったが、彼はすぐに思い出した。そうそれは、先ほどのニューズの冒頭で流れた、彼が吹き飛ばした結婚式場で式を挙げていた新郎の名だ。

「ば、バカなこと言うな。そいつは、俺が作った爆弾で吹き飛ばんだはずじゃ」

「ああ、吹き飛んだよ。特に、俺のからだは跡形もなく。だからこうして、ダチや家族の体の一部を借りてきたんだよ」

言いながら、つぎはぎだらけの春樹は自分たちの仇である青年の耳を耑り取った。

痛覚から湧きあがる激痛に、彼は喉を枯らすように断末魔を上げ、耳がなくなつた方の側頭部を抑えて身を折る。

春樹はそんな彼の髪を掴むと、無理やり引き上げた。

「だから、俺が借りた分のパーツが必要なんだよ。どういうことか、

わかるな？」

つぎはぎだらけの顔を押しつけるように、春樹が青年に問う。

もはや、彼に選択の余地などないことを知りながら。

それから春樹は、青年のもがき苦しむ断末魔をBGMに、彼の体を解体し始めた。自分の体を作るために借りた友人たちの体のパーツに合うように、幾千もの幾万ものパーツに青年の体を分断したのだ。

青年の両親が彼の部屋から漂う異臭に気がついたのは、それから2日が経過してからだった。

青年の部屋から結婚式場に使われたもの同系統の爆弾が発見されたため、犯人を追い求めて現場に来た大都の表情は険しい。

血まみれの部屋。

そこに残された、青年のものと思わしき脳髓だけだ。

結局、幾千幾万の破片に分解された彼の体は、この先も発見されることはなかったのだ………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8901z/>

ミリオンパーツ

2011年12月27日23時50分発行